

日本文学にあらわれたモンゴル人

芝山 豊

Mongols in Japanese Literature

Yutaka SHIBAYAMA

(以下は、2006年8月29日、内蒙古師範大学蒙古学学院において行った同大学と清泉女学院大学による学術交流会での講演を文章化したものである。)

はじめに

先日、大モンゴル成立800周年を記念してウランバートルで開催された第9回世界モンゴル学会議の席上、おもいがけなく、モンゴル作家同盟より文学功労賞を贈られました。多年にわたりモンゴル文学を日本に紹介し続けたことを評価して下さった由、まことに光栄に、またありがたく存じましたが、省みて、その名に恥じぬものであったかと自問しますと、甚だ心もとないのを感じますとともに、「少年易老学難成」ということを実感致しております。

この度、内蒙古師範大学とご縁ができましたのを機会に、何か講演でものご提案があり、いろいろと考えましたが、モンゴルの先生方や研究者の皆さまを前に、モンゴル文学について語る僭越を避け、本日は日本の文学作品にあらわれたモンゴル人について話させていただくことにいたしました。勿論、日本の国文学者とは違う、モンゴル研究者からの目線で、ということになります。

おそらく、私の研究については、ナツアグドルジ研究やモンゴル近代文学史、モンゴル語訳聖書の研究といった、どちらかといえますと文献学的なものが国外では知られていると思いますが、それらの他に、受容理論やモ

ンゴルに関わる日本のオリエンタリズムの研究というポスト・モダン的なアプローチによるものがありまして、本日は、そうした研究を通じて見てまいりました日本文学の中のモンゴル人について、お聞きいただこうと思います。

那珂訳『元朝秘史』

さて、元寇と呼ばれる歴史的な事件が大きなインパクトを与えたにも関わらず、江戸時代、モンゴルや蒙古という名前は市井の人々には縁のないものでした。その証拠に江戸期にロシアに漂流した大黒屋光太夫からの聞き書き『北槎聞略』(1794)にはモンゴルの用語は見えていません。

蒙古やモンゴルが日本人にとって、にわかに関心するものとなってきたのは、やはり明治期以降のことです。

モンゴルという言葉は、ひとつには19世紀的な弱肉強食の地政学的な問題として、もうひとつには、西洋のアジア認識の一部としてもたらされました。両者が絡み合って、日本人のモンゴル観を形成して来ました。

日本人はまず自分たちが西洋人から「モンゴル人種」として数えられているのを知ることになります。実際、コーカソイドやネグロ

イドという呼び方に比べて、モンゴロイドというのは特殊な命名で、OEDの用例が示すように、モンゴルという言葉は差別語としても使用されてきました。開国と同時に、19世紀的な西洋のアジア認識との接触の中で、日本人は「蒙古人」という呼び名の意味を考えざるを得なかったのです。

例えば、山路愛山(1864-1917)という明治文学史を語る上で極めて重要な人物がいますが、彼は、1914年に、「我は蒙古人種たるを恥ぢず」という論文を書いています。それに先立ち、1906年の本の中に「支那思想史に於ける蒙古人の功績」という一章を書いています。

素朴な西洋的世界観への接近、その批判的な受容のプロセスの中で、日本のアジア認識が生まれて来るわけですが、そこで重要な役割を果たしたのが『元朝秘史』でした。

同心円状に広がる中華世界の外側の縁にあった日本が、自らを中心とする帝国を形づくるためには、西洋史に対抗する中華社会のみの歴史にとどまらない「東洋史」が必要でした。宋代で終わる『十八史略』以降の「歴史」への必要が日本のモンゴル研究誕生の契機となりました。那珂通世(1851-1908)の『元朝秘史』の注訳である『成吉思汗実録』(大日本図、1907)の登場です。

那珂通世は維新の「負け組」、盛岡藩藩士の三男として生まれ、明治維新後、慶応義塾で英学を学んだ人物です。福沢諭吉の直接の影響下にあった人物であり、外国史を西洋と東洋に分けた構想の基礎にも「脱亜入欧」の精神があったとされています¹。

那珂訳『元朝秘史』の質の高さ(当時の水

準としての話ですが)とその出版の早さは驚きに値します。ただ、出版のタイミングが、日露戦争の後、ポーツマス条約で朝鮮半島、遼東半島の権益をはじめ東清鉄道南部の経営権を得た時期、即ち、日本にとって、満州での権益確保が最重要課題となっていた時期であることを考えますと、たとえ、篤実な学者が「価値中立」を目指していたとしても、やはり、日本の国策から完全に自由であったとは言えないでしょう。

この那珂通世の元朝秘史の翻訳『成吉思汗実録』が歴史学や言語学にどのような影響を与えたかは、本日、お集まりの方々には釈迦に説法でしょう。正直なところ、お隣に座っておられるトゥムルバガン先生は元朝秘史研究の泰斗ですから、『元朝秘史』について語るのには冷や汗ものなのですが、「元朝秘史学」とは別に、この翻訳が日本の作家に与えた影響の大きさは特筆すべきものであったことは申し上げておかねばなりません。

幸田露伴(1867-1947)、尾崎士郎(1898-1964)、井上靖(1907-1991)らのモンゴルに材をとった作品は『元朝秘史』の存在なくしてはありえませんでした。

那珂の翻訳『成吉思汗実録』は、注だらけの書物でありながら、日本の読者にとって、歴史書であるより、やはり、文学作品であったのです。やまと言葉の柔らかさと漢文の硬さを組み合わせ、モンゴル語叙事詩のもつ骨太の文体を訳出した那珂の訳文の格調は、他の訳が出た後も多くの人々をひきつけました。例えば、女性ユーモア作家、田辺聖子(1928-)もそうした人の一人でした。

最近では森村誠一(1933-)、堺屋太一(1935-)、津本陽(1929-)のような作家がチンギス・ハーンについて小説を書いているわ

¹ 田中正美「那珂通世」、江上波夫編『東洋学の系譜』(大修館書店、1992年)。

けですが、こうした作家たちもやはり那珂の影響下にあると言ってもよいと思います。しかし、那珂の影響は、世代的には戦前の初等教育を受けた世代あたりまでに留まるだろうと思います。漢文や日本語の擬古文に対する一定の知識がなければ、那珂の訳文は味わうことは難しいのです。

井上靖の『蒼き狼』

さて、那珂訳の『元朝秘史』から強い影響を受け、日本の読者に大きな反響を与えたチンギス・ハーンの世界を書いた作家は、尾崎士郎と井上靖の二人です。

尾崎士郎の『成吉思汗』については、既に「尾崎士郎とモンゴル」(『モンゴル研究』No.9, 1986) という短い文書を書いていますので、そちらをお読みいただくことにして、井上靖の『蒼き狼』(1959-1960) について、簡単に触れておきましょう。

本来、1206年のハーンの推戴がモンゴル国民国家の建設と必ずしも重なるわけではありません。しかし、今年(2006年)のモンゴル国の行事に関する言説を見ると、井上靖の小説がヒントとなっているのではないかという気さえます。

『蒼き狼』の中に、1206年クリルタイで、チンギス・ハーンが「勇ましく猛き新しい(国家)のモンゴルの狼たちよ」(新潮文庫 179頁) という言葉を使う場面が出てきます。井上はこのように民族と国家を半ば意図的に混同したような書き方をしています。

日本人がチンギス・ハーンを書くときは、なにかしら、日本人が自分たちの国家の運命にこころをよせているときのような気がします。

尾崎の場合は、第二次大戦直前で後書きの

中で率直にその思いを語っています。

一方、『蒼き狼』の場合、そうしたことはあまり問題にされてきませんでした。連載された頃、1959～1960年と言え、日本は安保闘争の最中、冷戦構造の中にあって、経済は高度成長へと大きく舵をきろうとしていた時代です。戦後の混乱から脱し、新しい日本の将来像を思い描く時代になっていました。今年、多くのチンギス・ハーンの小説が日本に現れているのも、バブル崩壊後の失われた10年を経て、日本が国家として何処に向かおうとするのか、人々が戸惑いを感じている時代背景と関連があるのかもしれませんが。

また、この小説の発表をきっかけとして起こった大岡昇平(1909-88)との歴史小説論争にも注目すべきでしょう。大岡の問題提起は、森鷗外の「歴史其儘と歴史離れ」以降の歴史文学をめぐる議論に最も大きな意味をもつものでした²。

ここで、歴史と文学という厄介な問題に深入りする時間はありませんが、『蒼き狼』を読むとき、作家は作家自身が生きる時代や社会のコンテクストを離れて小説を構想できるのかという問題が実感されます。

ご存知のように、井上靖の場合、チンギス・ハーンに「出生の秘密」という分かりやすいキーワードを与え、物語全体に見通しのよさを提供するわけですが、それはチンギス・ハーンの時代に生きたモンゴル人のこころのありようではありません。

「出生の秘密」というのは、日本文学の中では『源氏物語』以来の伝統的テーマであり、近代文学においても個我認識にまつわる一種の cliché (陳腐な決まり文句) ともいべき、

² 大岡昇平「『蒼き狼』は歴史小説か」(『群像』、1961-1) 他、『大岡昇平全集 15 評論』(筑摩書房、1996年)。

鍵概念であったわけです。ラーフ・フォックスの伝記ではチンギス・ハーンの出生問題が一言でかたづけられていること、また、チンギス以前は、クリルタイの制度自体が純血血統主義のようなものとは無縁の草原の原理を示していたことも十分に承知の上で、井上はあえてそれをフィクションの中心に据えました。

これは必ずしも井上靖の独創というより、日本の読者の期待というべきものと関連しているかも知れません。例えば、『蒼き狼』が書かれる少し前、1955年に製作された溝口健二監督の映画『新・平家物語』の平清盛の行動も「出生の秘密」によって説明されていました。

日本の社会を思い浮かべた物語づくりを理解するヒントは、勿蘭がチンギス・ハーンに向かって言う次のような言葉の中に見られるのではないかと思います。

「汝のいま私に対して持っているものは愛であるか？」(新潮文庫 169頁)

地の文章が現代文章語であるのに、会話の部分が古風な翻訳文語調であるのには、那珂の影響が見えるかも知れませんが、この『元朝秘史』の記述から大きく逸脱した挿話での対話の内容の奇妙さに気づく日本人は少ないかも知れません。しかし、モンゴル研究者の目から見ると、これは誠に奇異な問答なのです。何故なら、当時のモンゴル語にはこのような「愛」に当たる言葉はなかったのですから。言葉がなかったということは概念がなかったということです。実際、それは当時の日本語にもなかったでしょう。この用法の「愛」は日本語でもモンゴル語でも近代以降、西洋語の翻訳として成立した訳語としての概念です。実際、モンゴル語で「愛」をどのように

訳すべきかの翻訳論的な議論は1950年代まで続いていたのです。

モンゴル人民共和国時代のモンゴル文学に、S・エルデネ(1929-2000)の書いた「ホラン」(漢字で書くと勿蘭)という女性を主人公にして、チンギス・ハーンという渾名をもつ人物も登場する「ホランと僕の二人」という短編小説があったことをご存知でしょう³。チェーホフを目指し、自然科学者らしい心理描写を得意とするエルデネが描く、男と女の物語の中に、英語で書けばloveにあたる愛ということばは一度も登場しません。

井上靖は、歴史的なモンゴル人を描こうとしていたのではなく、『元朝秘史』を借りながら、1960年頃の日本社会における合理性をもったチンギス・ハーンを描いたのです。勿論、執筆当時はモンゴル人を読者に想定することは毛頭なく、日本の読者にとってのチンギス・ハーンだったわけです。

興味深いのは、作家がモンゴル人を他者化しているわけではなく、むしろ、限りなくよりそって、自分たちと同一視している点です。日本人である井上靖が、いわば、モンゴル人になりすまして書くのですから、生活世界での抵抗のある要素、日本的とかモンゴルのとか、そういう文化的な摩擦をうまく取り除いてあるのです。

今、日本語や翻訳を通じて『蒼き狼』を読み、この小説が好きだというモンゴル人は少ないのです。モンゴルの方々も『蒼き狼』を愛読するというと、一見、民族回帰的な傾向と見えるかもしれませんが、実は、そうは言い切れないのではないかと思います。モンゴ

³ С.Эрдэнэ, “Хулан бид хоёр”, 1960. *Монголын Уран Зохиолын Дээжис 31* (УБ 1997) 等のアンソロジーにも収められている有名な作品。日本語、英語にも翻訳されている。

ルの人々の生活意識が、小説の書かれた1960年頃の日本人の意識、つまり、脱コンテクスト的な、普遍を求める意識と大きく変わらないものになっているということでもあるからです。

『蒼き狼』に感動する中国やモンゴルの読者がいるとすれば、中国やモンゴルの固有の価値観ではなく、近代世界のもつ「普遍的」な価値の方向性から主人公たちに共感するということになるのでしょうか。

原典である『元朝秘史』には、近代人の思惟を寄せ付けないようなところがありますから、現代のわたしたちに、そう簡単に分かるはずはないのですが、『蒼き狼』は、通俗心理主義やロマンティック・ラブ、あるいはナショナリズムという近代的な装置によって、近代的な価値のチャンネルから見る限り、日本人にもモンゴル人にも見通しがいいのです。

出生の秘密の裏にある純血主義も極めて近代的な「発明された伝統」としてのフィクションであるともいえるでしょう。モンゴルはハイブリッドな集団として大モンゴルを構成してきたわけですから、本来、偏狭な純血主義などとは無縁です。チンギス・ハーンの後宮にしても、DNAの問題というより、残された女性たちに対する人間の安全保障としての互助原則を考えるのが自然かもしれません。帝国の拡張は、英雄の個人的なりビドーに還元できる問題ではそもそもないのです。

しかし、純血主義にはナショナリズムの琴線に触れる効果があることは否めません。実は、モンゴルの純血をめぐる問題は、井上靖より前に既に日本文学の中に登場しています。日本の実効支配の及ぶ地域のモンゴル族の人々を描く作品、所謂「植民地文学」という範疇においてそれを見ることができます。芥

川賞を獲った石塚喜久三(1904-87)の『纏足の頃』です。井上靖は石塚の作品と自作の関係についてコメントしていませんが、地下水脈においてつながる要素があるかもしれません。『纏足の頃』については、川村湊『異郷の昭和文学』(岩波書店、1990)という本の中でも論じられています。

長谷川四郎と村上春樹のモンゴル人

一方で、こうした普遍的な存在としてのモンゴル人の描写の対極にあるモンゴル人像もあります。

それは、井上靖のように文献の中のモンゴル人との出会いでなく、生身のモンゴル人との接触を通してもたらされたものです。例えば、シベリア、モンゴル抑留時代、モンゴル人との出会いによって生み出されたものがあります。その典型として、長谷川四郎(1909-1987)の『シベリア物語』(1952年刊)に収められた「ナスンボ」という小説をあげることができるでしょう。

運悪く、戦争の時にハルハ河畔に迷いこみ、日本人と同じ収容所で働くモンゴルの牧民が出張中アガで脱走を試みるという短い小説の中で、長谷川はナスンボをロシア人とも日本人とも違うモンゴル人として本質化してみせます。

誇り高いモンゴル人への深い敬意に満ちた作品ではありますが、モンゴルの方々にとって、主人公はあまり自己同化しやすい存在とは言えないかもしれません。ただ、大事なことは、長谷川はナスンボと同じ目線で描いているということです。そして、普遍的な人間的要素に加えて、モンゴル人としての生活世界の固有性を描きこもうとしているのです。

自分たちとは違う人々ではあるが共感し得

る人間としてナスンボは描かれるのです。ある意味で文化本質主義的なアプローチでありながら、ステレオタイプ化から辛うじて救われているのは、長谷川自身の体験と人間への深い洞察力によるものでしょう。

ステレオタイプ化について言えば、どうしても、村上春樹（1949-）の作品に登場するモンゴル人に言及せねばなりません。

村上春樹は現在、東アジアを含め、世界中で人気のある作家ですね。皆さんの中にもファンがおられるかもしれませんし、私自身もほぼ同時代、同郷の人間として、彼の熱心な読者であるのです。しかし、彼の描くモンゴルには一言いっておかねばならないのです。

彼はある時期まで、極めてコンテキスト・フリーな世界を志向していました。彼や私はアメリカ時代の子どもであることもありますが、彼のアメリカ文学研究がその文学的な素地を形づくっているとと言ってもよいでしょう。その結果、彼の普遍的な世界の構築のシステムの中で、モンゴル人はあたかもアメリカ大衆小説の中のそれと同じようにステレオタイプ化されています。そこに登場するモンゴル人は理解し難い、「絶対の他者」として立ち現れます。長谷川のナスンボのような共感できる存在として描かれることはないのです。彼の描く、モンゴルやモンゴル人は、与謝野晶子らの時代から続く、日本型のオリエンタリズムの延長線上にあると言えます。これについて私はかつてひとつの論文を書き、次のように結びました。

日本的オリエンタリズムをもって作家を断罪しようというつもりはない。しかし、『ねじまき鳥クロニクル』を読んだとき、面白い映画の最中に、突然、いかにもハリウッド的なステレオタイプのアジア人がスクリーンに写し出された時のような、なんともいえない居心地

の悪さを感じたことを告白しなければならない。ハードボイルド的な装いの中で二項対立の彼方へ飛翔するはずの想像力が、モンゴルに関しては、つり目の「フーマンチャー」をなぞるような役割しか与えられなかったことに失望を禁じ得なかった。

「中国や朝鮮は、日本に文化を輸出した国である。そこには、西欧の文明と対峙する文明がある。しかし、モンゴルには何も無い。あるのは広々とした空間であり、そこには「カタギでない」文明の対極の生活をする人々がいるに過ぎない。」といった日本人のモンゴル観は根強い。中国や朝鮮半島について日本的なオリエンタリズムが語られることはあっても、モンゴルについて語られない理由がそこにあると言えるだろう。あれこれ教化し、あれこれの施設を作ってあげなければならないと思う人々や、あるいはルソー風の「聖なる野蛮人」をエコロジカルな文脈の中でモンゴル人に見ようとする人々が出てくるのも無理からぬことなのだ。

また、どこかで、日本的オリエンタリズムの「ねじ」が巻かれ、多くの人々がモンゴルを訪れては、自分が見たいと思っているモンゴルを見て帰ってくるのである⁴。

この論文は、WEB上でも読めますので、是非、どなたかモンゴル語か中国語に訳してみてください。

司馬遼太郎のモンゴル人

さて、村上春樹とは対照的に共感すべきモンゴルを一種、理想化して描いてみせたのが、司馬遼太郎（1923-1996）でした。

司馬さんは私の大学の先輩であり、若い頃にお目にかかって薫陶をいただいた方ですから、先輩への礼儀として、追従ではない真剣な評論を、後輩へ語り継ぐメッセージという

⁴ 拙論「村上春樹とモンゴル もうひとつのオリエンタリズム」（『モンゴル研究』No.17、1998）45頁。

形で既に「司馬さんのモンゴル」(『モンゴル研究』No.18、2000)という文章を書きました。詳しくはそちらをお読みいただくとして、大事な点のみ、ごく簡単に触れておきたいと思います。

司馬遼太郎は作家として大成していく頃、モンゴルから離れていきますが、モンゴルへの思いは、「もし彼ら民族の心というものが書ければ、いつ死んでもいい」と発言させるまでのものでした。

1974年の『モンゴル紀行』は、彼のモンゴルに関する書物のなかで最も重要なものです。

連載の『街道をゆく』でモンゴルという話になった時、「モンゴルは夢の中の中の国だった」と言います。モンゴルに出かけるまでにもの凄い量のモンゴルに関する本を読んできました。頭の中にモンゴルができあがっていたと言ってもいいでしょう。そして、彼は自分の頭の中にあるモンゴルに会いに行っただけです。これはとても大事なことだと思うのです。実際のモンゴルを知っている人が作品に違和感を覚えるのはそのためです。モンゴルを知らない人にはその違和感がない。つまり、司馬遼太郎のモンゴルがあるがままのモンゴルだと思ってしまうかも知れません。でも、司馬が度々語るロマンとしてのモンゴル、そのモンゴルは頭の中にあるモンゴルです。モンゴル紀行で語られるモンゴルは本当の、あるがままのモンゴルではなく、彼の目を通したモンゴルであり、多少の修正があったとしても、頭の中のモンゴルです。所謂ポルターージュ作品ではないのです。

その頭の中のモンゴルは、その『モンゴル紀行』の後日談とも言うべき『草原の記』でも繰り返し登場します。

(なにが、モンゴルのななのだろう)

街を歩きながら、ずいぶん考えた。街にあるのではなく、草原にあるのではないか。あるいは草原にあるのではなく、虚空にあるのではないか、いっそ虚空そのものではないか、などと考えていくうちに、またしてもモンゴルへの想念が気体になった。

そんなことを思いたしながら、私はウランバートルの街を歩いている。

ここには、都市がもつ必然の性格としての隈雑さがない。ちかごろディスコやバーができたときが、ごく最近まで酒場がなかった。まして売春宿もない。

なにやらこのあたり、オゴタイのカラコルムと同様、危うくまぢぐるみ気体になりそうな気もし、またモンゴル人は大なり小なり、オゴタイなのではないか、とおもったりするのである。(新潮文庫 84 頁)

『草原の記』の「元の北帰」についての一節ですが、少なくとも『草原の記』の頃、モンゴルには売春宿はあったし、『モンゴル紀行』の頃でも、外国人の目につくところにも、主にロシア人相手の言わば売春婦的な人たちがいて、新聞記者としての鋭い観察力をもってすればウランバートルホテルあたりでもそれとなく分かったはずですが。でもそんなモンゴル人ではなく、奇跡のように欲望すくなく生きているモンゴル人を見たいと作家は思ったのです。だからウランバートルの町にオゴタイのようなモンゴル人を見た。勿論、オゴタイのように寡欲に生きているモンゴル人も沢山いるだろうことを私も否定しないし、そうあってほしいと心から思います。でも、『草原の記』が出版されてまもない1994年、ウランバートルに滞在していた私にはそういうモンゴル人の姿が見えませんでした。それで、「私には残念ながら先生が書かれたようなモンゴル人の姿をウランバートルの町で見る

ことはできません。」という手紙を書きました。

ただ、彼は作品の中で、頭の中のモンゴルと現実のモンゴルのバランスをとることを忘れてませんでした。頭の中のモンゴルを現実に戻す存在として、ツェベックマさんを置いたのです。現実への掛け橋だったからこそ、ツェベックマさんについて書くときに、とても気を遣っています。それは本当のモンゴルをしっかりと見ているからです。ちょっとでも書きすぎると、彼女やその周囲に直接的な影響が及ぶ。そのことを彼は熟知していたし、自分の文学のためなら、外国人の人生に多少の波風がたっても問題はないという風には決して考えなかった。ツェベックマさんがチタで生まれ、バルガに行って、バルガから内モンゴルの中心へ、そしてウランバートルまでという、その軌跡が示す現代史の重さを考え抜かれていたと思います。

では、そこまで現実のモンゴルを冷徹に観察しながら、頭の中のモンゴルを書こうとしたのは何故でしょうか。それは、我々日本人が失ってしまったもの、日本がここまでやってきたことの対極にあるものを描いてみたいということだったと思います。

『竜馬がゆく』、『坂の上の雲』を書き、軽蔑しつつも、いとおしくもある「欲望まる出し」で近代の価値理念で一生懸命に生きる市井の人々にエールを送り続けてきたけれど、日本人はあまりにも大きなものを失ってしまった。その対極にある、オゴタイのようなモンゴル人の姿を日本人に見せたかったからです。

「労働のよろこびもなく、農民の誇りもない」日本人、物狂いしている日本人に土地の所有の概念をもたないモンゴルの「聖なる単純さ」を示したかったのです。その証拠に、

晩年のエッセーには、アーリア系の美女を求めて西へ向かう性欲の塊のようなモンゴル人になって、富士山に向かって香を焚く「古人の心」をもつモンゴル人が登場するようになります。

そうしたモンゴルやモンゴル人の姿は日本人を讀者として想定して描かれたものであることは自身の認めるどころでした。

出会いと共感

司馬さんは、『草原の記』をモンゴル語訳する許可を求めた私の手紙に快諾の返事を下さいましたが、そこに、『草原の記』が果してモンゴル人にとって面白いかどうか」という意味のことを書かれています。モンゴル人にとってこの小説が普遍的な意味をもつかどうかをよく考えなさい、と私に問われたのだと思います。

しかし、私は大きな間違いを犯してしまいました。私は元朝秘史をモンゴル語に初めて訳した成徳公爵ツェンデの娘であるハンドスレン先生に『草原の記』の翻訳を斡旋したのです。実はツェンデ公の原稿を最初に印刷したのは我々の研究会でした。

ハンドスレン先生は司馬さんの予想通り、正式に許諾を得た訳業を途中で放棄されました。後から、ハンドスレン先生は「自分にはちっとも面白くなかったので」と述懐されています。ハンドスレン先生ご自身の体験からすれば、『草原の記』の主人公の体験はありきたりのものに見えたに違いありません。ある年齢以上のモンゴル人の読者の多くにとっても、そうかも知れません。結局、この作品の翻訳は若いモンゴル人の手によって行われ、トヨタ財団の助成も受け盛大に出版されたのですが、ハンドスレン先生には不可解なこと

であったに違いありません。しかし、きっと、司馬さんには分かっていたのだと思います。

司馬遼太郎の「夢の中のモンゴル」はふつと気体のように虚空に消えてしまう。それを作品の中に閉じ込めることができたのは、ツェベックマさんとの出会いだったと思うのです。ツェベックマさんの人生は司馬さんに会うことによって変わった。確かに、鯉渕教授の言われた通り、彼女の「希望だけの人生」は「実りある人生」に変わったのです。また、司馬さんもツェベックマさんに会うことによって変わりました。『草原の記』執筆の時期は、そろそろ死を意識しておられた頃でしょう。司馬作品の締め括りとなる本の主人公に選んだのはモンゴルの女性でした。初期の作品の中で、魅力において「犬より劣る」と英雄に無視させたモンゴルの女性の中から日本文学の中で最も魅力的な主人公の一人が生まれたのです。

『草原の記』は二つの魂の出会いと交流の物語なのです。

日帝時代や、文革時代、あるいはツエデンバル時代のモンゴルの悲惨をあれこれと聞かされるより、父の最期をモンゴルでみとった娘が、留学時代の父の通った聖橋をわたる、その万感の思いに、読者はより多くを受け取るのではないのでしょうか。

私はモンゴルにいて、司馬遼太郎の書く理想のモンゴル人がいないと不平を鳴らすような状況下で、ナツァグドルジーン・アーナンダーシュリという人に会ったわけです。彼女はもの心つかぬうちにモンゴルからレニングラードに連れ去られ、時としてはモンゴル人、時としてはロシア人として扱われてきました。そして、ソ連崩壊後、病を得てナショナルイズムの嵐吹きすさぶエストニアから終の棲家と

決めた父の国に戻り、誰からも見取られることなくこの世を去りました。ご存知の通り、彼女はモンゴル文学の父とよばれるダシドルジーン・ナツァグドルジ（1906-1937）の娘さんです。彼女の苛烈な人生がハンドスレン先生やツェベックマさんたちの人生とも重なりました。

司馬さんのような文学的な香りはなくとも、私が書いたアーナンダーシュリーの物語も日本人の書いたモンゴル人のひとつかもしれません。私が司馬さんから引き継いだものは、コンテクストから切り離された抽象的な人間への思念ではなく、歴史や文化や、生活世界のコンテクストに埋め込まれた個々の人間への深い共感の心です。

魂の出会いと共感を通して、他者化やステレオタイプ化という問題を克服していくことが可能だと私は信じています。

小説の他にも、絵本や漫画、映画、ゲームなどに登場するモンゴル人像にも触れてみたいと思っていたのですが、時間が尽きてしまいました。

これからますます多くの交流を通じて、日本とすべてのモンゴル地域の人々の中に深い共感が生まれることを祈念して、本日の拙い話を終えたいと思います。

（付記）

井上靖『蒼き狼』は、内モンゴル、モンゴル国ともに翻訳紹介されている。村上春樹作品については、『ねじまき鳥クロニクル』に限らず、モンゴル語の翻訳はなく、ほとんど紹介されていない。

モンゴル国でキリル文字によって出版され

たモンゴル語翻訳書籍の多くは内モンゴルで縦書きの伝統モンゴル文字にされて出版されている。しかし、『草原の記』は内モンゴルでは未だに出版されていない。これは、中華人民共和国の一部をなす内モンゴル自治区のモンゴル人社会の微妙な立場を象徴することかもしれない。

拙論「ナツァクドルジン・アーナンダシュリーと会って」(モンゴル研究会『モンゴル研究』No.16、1995年)は内モンゴル、フフホトで出版されている文芸誌『altan tulkhuur』誌の2001年春季号にモンゴル語訳され掲載された。翻訳者は内蒙古師範大学のツォルモン助教である。

アーナンダシュリーの物語は、モンゴル国国民以外のモンゴル人たちに、より強い印象を与えた。それは、彼ら自身が抱える「モンゴル人としてのアイデンティティー」の問題の切実さ故であろう。

(受付日 2007年1月15日)